

ヘルフタ女子修道院と聖心崇敬 —聖母の聖心への造形的アプローチへ向けて

蜷 川 順 子

ハート形は身近にあって馴染み深いものであるが、西欧キリスト教の伝統にもルーツがあるということはあまり知られていない。聖なる心 (Sacred Heart) に対する信頼や反応は、聖書の中に英語の heart に相当する語が876回も登場することから、初期教父時代以前から聖書テキストの註解や祈りの中で言表されていたと推察される¹⁾。これらに対する邦訳語として、み旨、こころ、心、心臓などが当てられているが、原語は同じでも訳語によって精神性あるいは肉体性のいずれかのニュアンスがより強く含意される場合が多いため、ここではそのいずれも担保するハートというカタカナ語を採用する²⁾。ただし、宗教的、教義的意味をもつ聖心の語はそのまま用いる。聖心に対する祈りが近代になって公式に認可されたのはイエスの聖心に関するものだけだが、中世以来の祈りや文献には、聖母を含む聖人たちの聖心に関する記述や、信徒たちのハートへの言及も少なくない³⁾。

本稿は、15、16世紀の西欧に聖母の聖心に対する崇敬がすでに存在し、磔刑のキリスト像を内包して空に浮かぶハート形と、地上でそれを祈る聖母の姿を組み合わせた図像 [図1] は、この崇敬に関連するものであったという仮説を立てる中で、その論証の一助となる小仮説を扱う。

宗教図像においては、言語による崇敬活動が先行し、それに基づいて図像が生みだされる場合が多い。イエスの聖心崇敬に関しては、12世紀のクレルヴォーの聖ベルナルドゥス (Bernardus Claravallis, c. 1090-1153) や聖ヴィクトル派 (Chanoines réguliers de Saint Victor) の神秘主義者たちの思想にその

萌芽がみられ、13、14世紀の神秘主義者たち、とくにネーデルラントとドイツの女性神秘家によって繰りかえされた幻視体験（聖籠）の中で具体性を帯び、それらが15、16世紀に生みだされた関連図像の土壌となったのではないかと推察される⁴⁾。

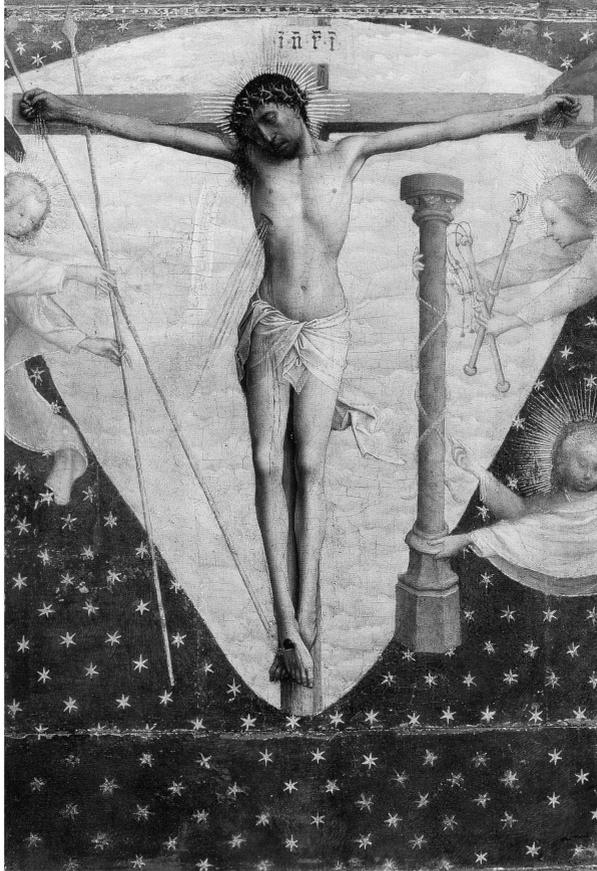


図1 フレマールの画家周辺《受難の道具をもつ三天使のいるキリスト》15世紀第1四半期（後年の再構成）、油彩、板、37.7×26.6 cm、ブリュッセル王立美術館。Public Domain.

ここでヘルフト女子修道院（Der Kloster Helfta, 以下ヘルフト修道院と言及）に着目するのは、何よりもその地理的な位置にある〔図2〕。聖母の聖心を描いた早いイメージのひとつは、1505年にヴィッテンベルクのザクセン選帝侯フリードリヒ賢公（Friedrich III, der Weise, 1463-1525）の宮廷画家となったルーカス・クラナーハ（父）（Lucas Cranach der Ältere, 1472-1553）が手掛けた木版画《聖心—ペスト図（疫病撃退図）》〔図3〕にみられる⁵⁾。また、ヘルフト修道院が位置するザクセン=アンハルト州には、マルティン・ルター（Martin Luther, 1483-1546）と関連が深いアイスレーベンがある。ルターが

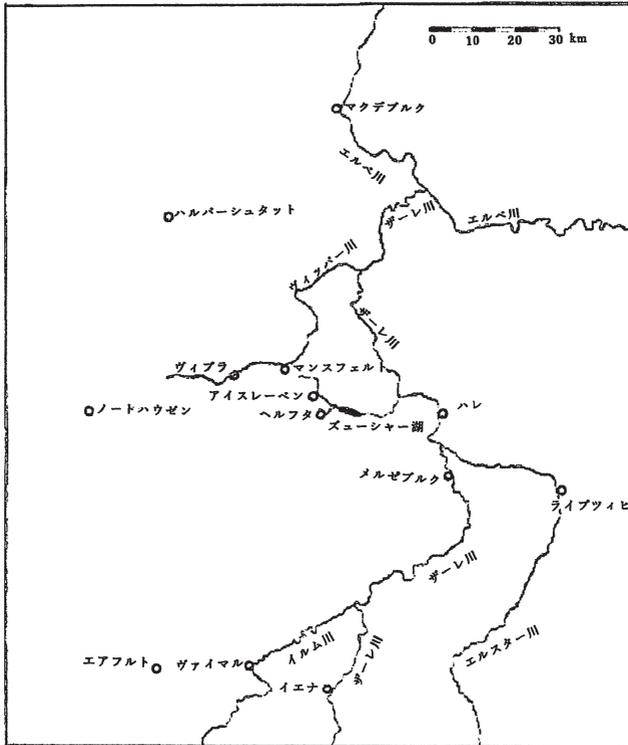


図2 ヘルフト周辺の地図. Bromberg: 4 に基づく.



図3 ルーカス・クラナハ（父）《聖心—ペスト図（疫病撃退図）》1505年
38.6×28.5 cm 木版画 個人蔵. 蜷川 2017 : 236.

1530年にプロテスタントの旗印としてその意味を表明した「ルターの薔薇」[図4]は、彼自身が早くから用いていた印章のデザインに基づくが、そのイメージの起源は聖母の聖心にあると考えることができる⁶⁾。これらのことにより、ヘルフタ修道院から広がりを見せた聖心崇敬の範囲内に、聖母の聖心に関するイメージの源泉のひとつがあったのではないかという小仮説をたてることができる。



図4 《ルターの薔薇》ベルリン大聖堂ファサード，筆者撮影。

実際ヘルフタ修道院が建設された13世紀前半は、新しい宗教や学問が大きく花開いた時代である。ドミニコ会を設立したドミニクス（Dominicus, c. 1170-1221）が没した2年後の1223年に、ドイツの神学者アルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus, c. 1193-1280）が同会に入会、このとき後に彼の弟子となるトマス・アキナス（Thomas Aquinas, c. 1225-1274）はまだ幼かった。フランシスコ会の創始者アッシジのフランチェスコ（Franciscus, 1181-1226）は、死後2年でグレゴリウス9世（Gregorius IX, 在位：c. 1170-1241）により列聖され、将来のフランシスコ会を担うボナヴェントゥラ（Bonaventura, 1217-1274）も少年であった。ドイツで最初のフランシスコ会第3会員であったテューリンゲンの（あるいはハンガリーの）聖女エリーザベト（Elisabeth von Thüringen, 1207-1231）も同時代に近隣で活動していた。このような時代にあって、イエスの神性と人間性が神秘的な仕方で合一する聖心のイメージは、新しい宗教的潮流の発現と期を一にする。

ここでは、聖心崇敬の中心地のひとつだったヘルフタ修道院および、聖心に関連した幻視体験がある3人の修道女について短く論じ、その叙述から聖母に関する事項をとりだす。さらにこれらのテキストがさまざまな造形イメージにつながった可能性を探る。

1. ヘルフタ修道院と第2代修道院長ハッケボルンのゲルトルート (Gertrud von Hackeborn, 1232-1291)

ヘルフタ修道院の地理的条件は、その成立の宗教的政治的背景と密接に関わっている。さまざまな宗教施設では夢による縁起がつきものであるが、1229年にその夢を見たのは聖職者ではなく、ザクセン最古の家門のひとつマンسفルト伯ブルクハルト（ブルヒャルト）1世（Burchard I von Mansfeld, 1229没）であった。その夢は、「神の母にして、慈愛の母であるマリアを讃える、女性のための修道院建設に、汝の莫大な富を投入しなければ、救われないであろう」という警告であった。これを重視した伯は、同年の自らの死の直前に、妻エリーザベト・シュヴァルツブルク（Elisabeth von Schwarzburg, 1260没）と共に、マンسفルトの彼らの城の近郊に聖母女子修道院を建設した⁷⁾。最初に入所した7人は、ハルバーシュタットにあったシトー会ザンクト・ヤコブおよびザンクト・ブルクハルト修道院から移り住んだ修道女たちで、そのうちのクニグンデ（Kunigundis von Halberstadt, 1229-1251）が実質的な修道院長を務めた。1234年に、おそらくは後継者なく未亡人となったエリーザベトの安全上の理由から、彼女と修道女たちは、数キロしか離れていないロダースドルフ（あるいは、ロストドルフ）に移転した⁸⁾。

この修道院に、テューリンゲンの名門男爵ハッケボルン家のゲルトルートが、実家からの膨大な寄付を携えて加わるようになった。彼女はまもなく1251年に、20歳になろうとする若さで実質的に2代目の修道院長となった。実家からの寄付を原資として書物を購入して図書室を作り、祈りと学問を重視した生活設計を立てて修道女たちを教導した⁹⁾。このため評判があがり、入所を希望

する修道女たちの数が増えた。1253年には兄弟であるハッケボルンのアルブレヒトとルートヴィヒの援助でヘダースレーベンに娘修道院を建設した¹⁰⁾。銀鉱山開発の関係で修道女たちの生活に必要な水が不足し始めたため、1259年にアイスレーベンの南東2、3キロにあるヘルパーデ（現ヘルフタ）に移転し、ここにとどまったおよそ83年間に、修道院は最盛期を迎えた。ただし、ここに集う修道女の多くに貴族の係累があったため、その関係で争いに巻き込まれたり、訴えられたりすることもあった¹¹⁾。

1342年、ついに当時の修道院長ルトガルト（Luitgard）の兄アルブレヒト・フォン・ブラウンシュヴァイク2世（Albrecht II von Braunschweig, c. 1294-1358）がハルバーシュタットの司教位をめぐる争いから修道院を襲い、火を放った¹²⁾。このときに修道女たちの貴重な証文や手書文書が焼失した。教皇は報復として彼を司教として認めなかった。ルトガルトは父マンスフェルト伯ブルクハルト4世を説得して援助を得て、第4の地となる近くのノイ＝ヘルフタで修道院を再建した¹³⁾。

16世紀になると、修道院はルター派のプロテスタント宗教改革に巻き込まれて、1525年の農民戦争の間に攻撃された¹⁴⁾。このとき修道院の書物や手書文書が再び壊滅的な打撃を受けた。宗教戦争後も、かつての指導力を取り戻すことはなく、1546年に修道院は閉鎖された。およそ300年後の1868年にベネディクト派の修道院として復活するが、初代修道院長が没すると1874年の5月法によって修道院の財産が没収され再開鎖された。1890年には財産が買い戻されて大ゲルトルートに捧げた教会が建設され、修道院附属聖母教会には、彼女の像が置かれた〔図5〕。最終的に、1999年に修道院はヘルフタの地にシトー会的女子修道院〔図6〕として再建されて、現在に至っている¹⁵⁾。

ここで概観した修道院の歴史から容易に想像されるように、13世紀に花開いたヘルフタ修道院で制作された書物の原本は、修道院外部に流出した模本を除いて残されていない¹⁶⁾。

最盛期のヘルフタ修道院が所属した会派に関して、シトー会だったのかベネ



図5 《大ゲルトルート》ヘルフト修道院聖母教会, 筆者撮影.

ディクト会だったのかという議論が続いている。その設立に関わったハルバーシュタットの修道女たちはシトー会の出身者たちで、15世紀前半に編纂された資料でも「灰色の修道会 *moniales grisei ordinis*」というシトー会の修道服を指す用語が用いられており、現在のヘルフト修道院もそうなので、シトー会



図6 ヘルフタ修道院の一角，著者撮影。

だったのではないかという議論は根強い¹⁷⁾。これに対して、ヘルフタ修道会設立前年に、シトー会は女子修道院の設立を禁じ、この禁止は1228年に採択され1235年に再確認されたので、修道会の所属はベネディクト会に変更されたという研究者もいる¹⁸⁾。しかしながらエリザベス・フリーマンは、12世紀の半ば以来シトー会の慣習にしたがう女子修道院は少なくなく、設立禁止令がだされたのは、女子修道院が増えすぎていたためではないかとみている¹⁹⁾。

聖心崇敬を扱う本稿の文脈では、その初期の推進者のひとり、クレルヴォーの聖ベルナルドゥスや、聖心崇敬を最初に表明した修道女として知られるトンヘロンのルトガルディス（Lutgard van Aywières, 1182-1246）が、共にシトー会に属していたため、聖心崇敬に関しては、シトー会派内の連携を通して展開した可能性は高いと考えている²⁰⁾。しかしながらこれらの会派以外にも、フランシスコ会やドミニコ会といった新しい托鉢修道会との関係も示唆されており²¹⁾、結局のところ修道院長ゲルトルートは、特定の会派に専属することなく、

ハッケボルン家の財力を基盤として、独自の修道院運営をしたのではないかとすることができよう。

すでに述べたように彼女は、典礼に基づく敬虔な信仰生活と、当時は珍しかった読み書きができる女子教育をすすめ、1291年の没年までに100名以上の女性をヘルフタに招いた。その中には、妹のハッケボルンのメヒトヒルト（メヒティルト）(Mechthild von Hackeborn, 1241-1299)や彼女にちなんで名付けられた大ゲルトルート（Gertrud die Großen von Helfta, 1256-1302）、同じく幻視で名を馳せたマクデブルクのメヒトヒルト（Mechthild von Magdeburg, 1207/10-1282/1294）も含まれていた。自身は著述を行わず、伝記も残されていないが、後に述べる大ゲルトルートの著作の随所に修道院長に関する情報が含まれている²²⁾。

彼女の活動で特筆すべきは、典礼に基づくミサや聖体拝領を重視したことである。聖体拝領は13世紀にはあまり実施されておらず、とくに「ふさわしくないままキリストの肉を食し血をすする者は非難される」という『コリント人への手紙』（11：29）に基づき、この頃の聖餐の神学においては、聖職者と平信徒の間により広い隔たりが設定されていた。1215年の第4回ラテラノ公会議で、少なくとも年に1回聖体拝領が義務付けられたことに鑑みるなら、ヘルフタ修道院での実践は例外的に多かったとされる²³⁾。キリストの肉と血をめぐる瞑想や思弁を重ねることで、独特の幻視体験が報告されたものと思われる。以下では、ヘルフタ修道院が最盛期に輩出した三人の聖女の生涯とその幻視体験を扱い、とくに聖母に関することをそれぞれ抽出する。

2. ハッケボルンのメヒトヒルト

2-1 ハッケボルンのメヒトヒルトの生涯

修道院長ゲルトルートのおよそ10歳年下の妹メヒトヒルトは同じく、裕福な男爵ハッケボルン家の出身である。7歳のときに、母に連れられて、当時ロー

ダースドルフに移っていた聖母修道院に姉を訪問した際、そこに留まることを強く望んだため、修道院の学校に入ることになった。実際には、家族と頻繁に接触し行き来が続いたようであるが、明るく積極的な女性に成長したと言われ、正式に誓願を立てて修道女となった。

修道院の学校で特別な教育を受ける中で、天性の美声に加えて、その音楽的才能が開花し、聖歌隊の先唱者としても活躍した。聖具や図書管理を行い、修道女たちに文章を教えた。実際、著述に優れ、修道院の収入の一助ともなる写本制作をすすめた。また写字者としてばかりでなく、画家として高価な挿絵制作も行ったと言われるが、彼女が制作した写本は現在までのところ一点も発見されていない。聖歌隊席と学校と図書室と写本を制作するスクリプトリウムが彼女の活動の場であった。

1261年、20歳になったとき、修道院の門の前に捨てられていた5歳の少女の世話係となった。この少女は修道院長の名前をもらってゲルトルートと名付けられた。後に述べるように、長じて「大」が付けられる稀有な存在となるが²⁴⁾、二人は生涯深い友情で結ばれた。

50歳に達した頃、修道院長の姉ゲルトルートも重篤な病に侵されていた中で、彼女自身も頻繁に頭痛に悩まされるようになった。8年間も聖歌の務めを果たせないでいることや、他の修道女に負担をかけているとの心痛もあって、この頃からイエスと出会う幻視体験を他の修道女たちに語るようになっていた。この語りを、1290年ころから教え子のゲルトルートを含むと思われる²⁵⁾二人の修道女が密かに7年間にわたって書き留めたが、イエス自身がこの書物についてメヒトヒルトに語り、彼女自身は見たこともないこの書物の外観を述べることができた²⁶⁾。この書は『特別な恩寵の書 *Liber specialis gratiae*』という書名がつけられ、メヒトヒルトの没後に叙述が終了した。全7巻のうち、第1巻から第4巻までは聞き書きの形式がとられており、ハッケポルンのゲルトルートの後任にあたるクヴェアフルトのゾフィーは、ある高位の聖職者の同意を得て、メヒトヒルトが打ち明けた恩寵の体験を書き留めるよう、二人

の修道女に指示をだしたことが記されている²⁷⁾。

第2巻を訳出した梅原久美子によれば、文学類型のうえから「修道女伝」とすることができる²⁸⁾。姉にあたる修道院長ゲルトルートについても述べられていて、修道院長であった姉の「活動的生」に対して、妹の「観想的生」をあらわすようにその生活や活動が対比され、二人が統一的な有機性をもつものとして提示されている。内容面からは「幻視文学」とみなすことができ、幻視を見る時間や空間が、教会歴、聖務日課、典礼と密接な関係を有している点が注目される。すなわち「教会制度によって規定された外的条件」が、しばしば、「彼女の魂が見る内的な幻視を成立させる契機」となっているのである。

2-2 ハッケボルンのメヒトヒルトと聖心崇敬

メヒトヒルトの霊性の特徴としてまずあげられるのは、イエスの聖心への崇敬である。それはさまざまな比喩を用いて、神の恩寵の具体的な表れとして描かれている。その描出のしかたは思弁的ではなく、抽象的ではない具体的な空間や量感をもって描出される点で、挿絵画家でもあったメヒトヒルトには聖心を絵画的イメージとして捉える能力があったことがうかがわれる。またそれは、音や音楽の比喩を用いた五感の能力として示される。ここでは、恩寵の体験を叙述した第2巻から、その描写をいくつか抽出する。

第2巻の第1章は聖母の記念日の祝典で、マリアを讃えたいと願うメヒトヒルトに現われたイエスと聖母の様子が描かれている。聖母は赤や金色の薔薇が織り込まれた黄色の肩布をまとい、金色の薔薇を織り込んだ緑のマントをはおり、金色のトゥニカを身に着けていた。ここでメヒトヒルトは、黄色は謙遜、赤は忍耐の堅固さ、金は愛を表すという色彩の象徴的意味を述べている。イエスの聖心を通して聖母を讃えたメヒトヒルトは、1本の喇叭が神の聖心から魂のハートに向かって伸びていき、そこから再び神の聖心へ向かって戻っていくを目撃する。ここでは、ハートの交換というモチーフが、音を想起させる楽器の比喩を用いて示されている²⁹⁾。

第2章で聖心は、メヒトヒルトの心を清める甘美な神性の宝庫として示される。その中では生ける川、樹木、葡萄園がある地面が広がり、園丁姿のイエスが地を耕し、恩寵を分かち与えている。この後聖心から1本のギターが現われ、ふたたび音を想起させる弦の比喩が示される。第3章では、神の聖心と重なりあうハートや、燃える聖心のイメージ〔図7〕が提示される。続く章でも、聖心の中に常住の住まいをもつ（第10章）、聖心のうちに誘い込む（第20章）、ランプの形をしていて明るく燃える聖心（第21章）、厨房にたとえられた聖心

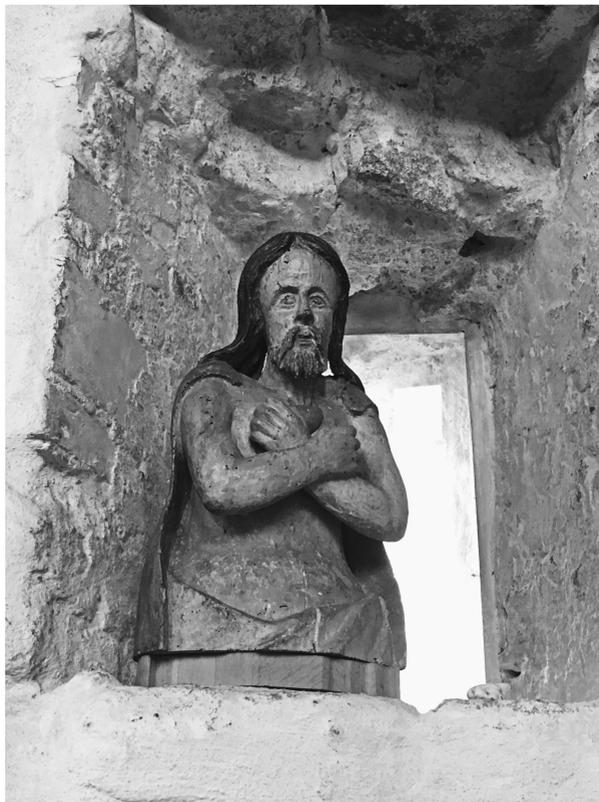


図7 《燃える聖心をもつイエス》ヘルフタ修道院聖母教会，筆者撮影。

(第23章) など多岐にわたる。

ハート内部の世界を描きだすもの、燃えるハートや光るハートなど外部への働きかけを示すものに大別される中、第23章の聖心内部を厨房とする幻視は、葡萄酒やパンなどの食物とそれを摂取することで神と合一する聖体の意味と響きあいながら、メヒトヒルトの上演的とも言える世界を表している。ここではハートの交換という、ルトガルド以来のモチーフが、「神々しい悦楽の奔流」が「聖心の湧き出る泉から流れ出て」、聖人たちがめいめいの胸からとりだした「金の皿のような形をした」ハートに流れ込み、ふたたび主の聖心のうちに還流するという、共同体的ヴァリエーションで繰り返えされている³⁰⁾。

2-3 メヒトヒルトにみる聖母の聖心崇敬

ヘルフタ修道院は、そもそも聖母に捧げられた共同体なので、上述のメヒトヒルトの口述に基づく『特別な恩寵の書』第2巻第1章にあるように、色彩や形態面で非常に具体的な聖母のイメージが示されている。状況に応じて、聖母は彼女の悩みに解決をもたらし、祈りを指南する仲介者としての役割を果たすが、その叙述から聖母に対する崇敬の念がうかがえる。

聖母の聖心崇敬に関する具体的な言説が語られるのは、第23章の聖心内部が厨房となっている幻視においてである。ここで「悦楽の奔流」が聖心と聖人のハート間を往来した後、イエスはメヒトヒルトに次のように述べている。「さあ、まず初めに処女なる私の母の最も清らかな心に近づき、そこで身を洗うように努めなさい。すなわち、私の母の限りなく気高い忠実さを讃え、感謝を捧げなさい。」これ以外にもマリアのハートに関する叙述は散見されるが、積極的に接触するようにすすめるのは、まさにこの部分である。

3. ヘルフタの大ゲルトルート

3-1 ヘルフタの大ゲルトルートの生涯

メヒトヒルトが20歳になった時、孤児としてヘルフタ修道院の門の前に捨てられていた、当時5歳だった女兒の世話をしよう修道院長から命じられた。生地や両親については知られていないが、おそらくテューリンゲン出身で、1256年1月6日に生まれたことがわかっている。おそらくは彼女を拾い育てた修道院長にちなんで、ゲルトルートという同じ名前がつけられたものと思われる。修道院の学校では頭の良さで直ぐに頭角をあらわし、聖書はもちろんのこと、アウグスティヌス（Augustinus, 354-430）、大グレゴリウス（Gregorius I, 在位：590-604）、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、クレルヴォーの聖バルナルデイスなどを読み、ラテン語の読み書きも流暢に行ったとされる。そして宗教者としての生活を送るより、文法、修辞学、弁証論、算術、幾何学、天文学、音楽の自由七学芸に沿う学問の道を選ぼうとした。しかしながら、1280年の待降節から翌年のマリアの清めの祝日前の月曜日まである種の精神的危機に見舞われていたらしい。そしてその1281年1月27日にキリストの姿を幻視体験したときから、彼女の中に変化が生じた。このとき学問的というより霊的認識に意識を向けるように改宗したと言われる³¹⁾。

ゲルトルートの著述の原本は、すでに述べた1525年の農民戦争に際して多くが失われたが、修道院の外にあった模本は残された³²⁾。現存する最古の写本は1536年にケルンのカルトウジオ会士のヨハネス・ランツベルク（Johannes Landsberg, c. 1490-1539）が出版したラテン語版で、これは現在に至るまで出版されたさまざまな翻訳の底本となっている³³⁾。

ゲルトルートの自著とみなされているのは『霊的訓練の手引き』である。霊的訓練とは初期のラテン・キリスト教世界で一般的に行われていたことであるが、ランツベルクが聖心について伝えたと言われるイエズス会で、イグナティ

ウス・ロヨラ (Ignatius de Loyola, c. 1491-1556) が表した『靈操』も、この系譜上に置くことができる。ただし大ゲルトルートの思想は、人生を7つの段階に分けてその第5段階でイエスとの結合をあげている点で、キリストと自分との愛の關係に根差し、キリストの人格との内的婚姻という神秘主義の系譜に置かれるものである³⁴⁾。

今に伝わるもうひとつの著述『神の愛の使者』も原本が存在せず、15世紀から5点の写本が知られていたが、最近14世紀の写本が発見された³⁵⁾。この本の刊行に関して、ゲルトルートは1289年の聖なる木曜日に幻視体験を書物にしたいという強い願いを抱いた。5巻からなる靈的伝記は、病に侵され45歳で没するまでの体験を扱うが、晩年になると書くことが困難になったため、ヘルフタの逸名の修道女たちが彼女と対話するなかで執筆を続けた。これら複数の書き手たちの序文によると、神が全5巻の合体を望んだとされる³⁶⁾。

3-2 『神の愛の使者』³⁷⁾ にみる聖心崇敬

『神の愛の使者』は第2巻の第10章に明かされているように、「己のいたらなさにためらいを覚えて執筆を中断した」彼女に、「神の愛の決定的証言を残すように命じた」主自身の依頼にしたがって完成されたものである。ゲルトルートが改宗前から聖心の祈りに接していたことは、彼女がメヒトヒルトに育てられたことから容易に想像がつくが、彼女にとって神の愛の象徴はイエスの聖心であり、神への愛を人のハートに喚起し高めること、神との合一に到達することが、この書の使命であった³⁸⁾。実際、本書でもっとも詳細に記されているのは、内的な聖痕とハートを射抜かれたことである³⁹⁾。

第1巻は修道女伝の形をとり、ゲルトルートの幻視体験と改宗について、ヘルフタ修道院の同僚修道女たちが論じたものである。ローラ・グリムはアウグスティヌスの『告白』に範を得て書かれたものとしている⁴⁰⁾。

第2巻は、靈的自伝とも言える書である。改宗に際して起こった幻視において、「彼の右手が私の手を捉えるのが見えた……彼自身が私を抱え、何の苦も

なく抱き上げて、彼の傍らに置いた」と、触覚感覚を強調しながら、また別の日にはハートに訪れる光として、あるいはハートに内住する存在として、イエスとの合一とその至福を記している。さらに、十字架像の前で祈るときに「私の心をあなたの愛の矢もて貫き給え」と祈願すると、内的な聖痕が起こった。また、「写本の頁に描かれた十字架像の右側、脇腹の傷のあたりに、あたかも輝かしい陽の光が鋭い矢にも似て現れているかに思われた」⁴¹⁾。さらに「あなたの最も聖なる傷の、愛し崇拝すべき聖痕が、私の心の内奥に、実際に肉体のその箇所がわかるかのように刻み付けられているのを、私は精神を介して知った」⁴²⁾。このような、ハートへのイエスの内住、内なる聖痕、ハートを貫く愛の矢、傷から発せられる光に加えて、燃えるハート、ハートの交換、神の流入、合一など、肉体的感覚と霊的認識とが聖心を介して交錯する様子が記されている。

第3巻は彼女の幻視を叙述し、神学的に捉え直したものであるが、伝統的な魂と肉体との固定的な二元論を崩壊させる、身体的感覚と霊的感覚の併存が論じられ、聖餐の調和的機能を聖心崇敬と結びつけている⁴³⁾。

第4巻では、特別な典礼に際して彼女が見た幻視が扱われる。神の玉座に向かい、そこで聖アウグスティヌスと聖ベルナルデイスの傍に自らが立つことが書き留められている⁴⁴⁾。また、アウグスティヌスの言葉や行為や格言や著述を、イエスが光線の形で自らの聖心に引き込み、次にイエスがアウグスティヌスのハートに、ゲルトルートを含む読者のハートへ流れ込んだすべての教えを戻すという、聖心を介した交換のイメージがはっきりと記されている。また別の機会には、再びアウグスティヌスが自らのハートを開いて、それを香り高い薔薇の形で神へ贈り、彼は信徒たちのハートが薔薇のように香ることを神に祈っている⁴⁵⁾。

第5巻では、死の床にあるゲルトルートに現れたイエスがこの本を胸に当てて、イエスの5つの傷で豊かになるように本の権威付けを行った。全5巻の合体は、5つの傷のイメージに似ている。彼女とこの書物はキリストの傷を通し

て結びついている。こうした身体性を通してキリストと合体することは、中世から近世初期にかけて女性宗教家にはよくみられる。しかしながらゲルトルートの特徴は、たとえばビンゲンのヒルデガルト (Hildegard Bingen, 1098-1179) がそうであったような身体的痛みや犠牲を強調するのではなく、それを聖餐的合体とみなす点にある⁴⁶⁾。

ゲルトルートの書物と身体は、傷と聖餐に関わるキリストの人間性ととくに連携する。1662年の翻訳者は、ゲルトルートの様式が、女性的な弱さや苦しみを強調したものではなく、高慢でもないことを指摘する。身体的な痛みと共鳴するために聖痕という形で身体を傷つけることはなく、十字架というより聖餐的交感という方法によって神と結びついたのである。

このようにゲルトルートは、聖心のヴィジョンや聖餐のホストを受け取ることで、イエスの人間性を通した神との結合を強調し、そこから神性への接近可能性を論じた。すなわち積極的の神学的人間学を展開したと言える。そうした中で、聖母のハートに積極的に言及している点が注目される。

3-3 大ゲルトルートにみる聖母の聖心崇敬

大ゲルトルートは改宗してまもなく内的聖痕を受けたとされるが、それは聖母が子宮にイエスを宿したことを祝福したときのことである。したがって彼女は、自らのハートはキリストの聖心だけではなく、聖母のハートにも似ていると理解していた。ここに、彼女の内的聖痕が、聖母の聖心崇敬にもつながる手がかりがある⁴⁷⁾。また、彼女の霊的経験をつづった第2巻全24章のうち10章が、マリアとの関連を中心に展開され、マリアに関する重要な発言が含まれていることは注目に値する。

4. マクデブルクのエヒトヒルト

4-1 マクデブルクのエヒトヒルトの生涯

エヒトヒルトは1207年頃、西ミッテルマルクの貴族の家庭に生まれ、宮廷風の教育を受けて育ったことから、彼女の叙述には宮廷風モチーフや俗語詩の影響と思われる抒情的要素がみられる。12歳に初めて聖霊の挨拶を受け、その後途絶えることなく続き、これらの幻視体験を「挨拶」という言葉を使って、彼女は神の慈愛として捉えている。

1230年、23歳の時に両親の家を出て、マクデブルクのベギン共同体に入り、禁欲と清貧と苦行の生活を送りはじめた。ベギンになってからも法悦的な神との合一体験が続いたが、彼女の聴罪司祭だったドミニコ会のハインリヒ・フォン・ハレ（Heinrich von Halle）のすすめで、啓示の証として5巻からなる『神性の流れる光』⁴⁸⁾の執筆にとりかかった。しかしながらヘルフタ修道院で行われていたような、女子教育を受けたわけではないので、ラテン語の素養は皆無だったと言われる。

本書の最初の5巻が完成した後、この著作に対する敵視、批判、脅迫が続き、あるいは教会批判を行ったとされるベギンに反対する、1261年のドミニコ会会議の決議や重い病も手伝って、エヒトヒルトはしばらく家族あるいは親族の元に返されていた。この頃第6巻が執筆された。その後1270年頃になって、ハインリヒのすすめ、または家族や親族の提案でヘルフタ修道院に迎えられることになった。ここで、最後の第7巻を執筆しながら、世を去るまでの10余年の時間を過ごした。最晩年には視力を失い、その後は修道女たちによる口述筆記で完成された⁴⁹⁾。

したがって、マクデブルクのエヒトヒルトはヘルフタの三大神秘思想家に数えられるが、その著述の大部分はヘルフタ以外のところでなされたものである。

4-2 マクデブルクのマヒトヒルトと聖心崇敬

マクデブルクのマヒトヒルトは、ハッケボルンのマヒトヒルトやヘルフタの大ゲルトルトの著述にみられる、ハートの交換、ハート内の定住、ハート内の聖痕のような、伝統的な二元論を揺るがせかねない新しいイメージは、さほど多くない。むしろ、魂と肉体とはかなり明確に分離されており、神が「大きな炭火の中で灼熱して燦然と輝く黄金」⁵⁰⁾のような聖心を示すのは、魂に対してであり、そこに溶かし入れられるのも魂である。『神性の流れる光』の第7巻はヘルフタ修道院で執筆され、修道女たちの口述筆記により完成されたため、ヘルフタで語られていたようなハートのイメージが含まれる。たとえば「あなたのために彼は多くの焼けつくような傷を受けた。これをあなたのハートに入れさせよう」(第7章27)⁵¹⁾というくだりは、彼女がヘルフタに来た時には存命だった、ハッケボルンのマヒトヒルトにみられる愛による傷の交換のイメージ、受苦神秘主義を思い起こさせる。

ただし、ハートの言葉や概念そのものは、すでに述べたように広くキリスト教世界でみられるものなので、第1巻冒頭の書名の説明にある、「神性の光が流れ入る」先の「過ちなく生きるすべての心」⁵²⁾のハート概念は、ヘルフタの聖心崇敬の中で注目されるような、神性と人間性とが合一する場としては捉えられていないように思われる。

4-3 マクデブルクのマヒトヒルトにみる聖母の聖心崇敬

『神性の流れる光』の内容目次によると、聖母は第1巻第22章、第2巻第3章、第5巻第23章で扱われている。聖母への賛歌と思われる詩文の中に「傷が深まれば深まるほど、彼女はますます大胆に突き進む」⁵³⁾という《聖母の七つの悲しみ》⁵⁴⁾——この概念と聖母の聖心崇敬との関係はあきらかである——に関連するかもしれない章句があるが、明確に展開されているわけではない。むしろ伝統的な《授乳の聖母》に触発されたような、「私の胸は真の寛き慈悲の

純粹にして穢れない乳に溢れておりました」や「十字架のほとりで乳を授けました」⁵⁵⁾ など乳を授ける章句が多い。したがって、聖母の胸に対する言及があっても、そこに血を流す聖心はあまり含意されていないのである。

5. 15世紀から16世紀の拡がりとは造形イメージ

すでに述べたように、修道女たちの多くは貴族の出身であったため、多くの寄付が得られた代わりに、世俗世界の内紛に巻き込まれることもしばしばであった。ハッケボルンのゲルトルートが修道院長だった頃に書かれた書物や、制作された挿絵入り写本は、1342年のアルブレヒト・フォン・ブラウンシュヴェイク率いる軍による修道院焼き討ちと、1525年の農民戦争に巻き込まれて略奪を受けたときに失われてしまった。しかしながら、修道院の外に模写などの形で持ちだされたものもあるため、ここでは翻訳などの形で広がった軌跡の一部を辿り、聖心崇敬やそのイメージの拡がりという観点から確認しておきたい。

また造形イメージについても、クレルヴォーのベルナルドゥスが目を惑わせるものとして反対していたので、ベギン会や修道院ではあまり制作されなかったとみなされている。しかしながらヘルフタ修道院は、女子修道院によくみられる編物や織物や刺繍制作というより、写本制作室や図書室を備えていて、写本制作でも収入を得ていたことが知られている。またハッケボルンのメヒトヒルトは、写本挿絵にも優れていて、幻視体験を描写した著述にもさまざまな象徴的意味をもつ色彩が駆使されている。こうしたことから、ヘルフタ修道院において聖心にかかわる造形イメージが生みだされていなかったかと思われるが、現時点でハッケボルンのメヒトヒルトをはじめとする修道女たちが、直接書いた写本や挿絵は発見されていない。ただし、後年の写本の中には紙の商標の透かし模様があるものもあり、丹念に調査をすれば、いくつかの造形イメージに辿りつく可能性があるかもしれない [図8]⁵⁶⁾。

梅原によると、ハッケボルンのメヒトヒルトの『特別な恩寵の書』の写本に

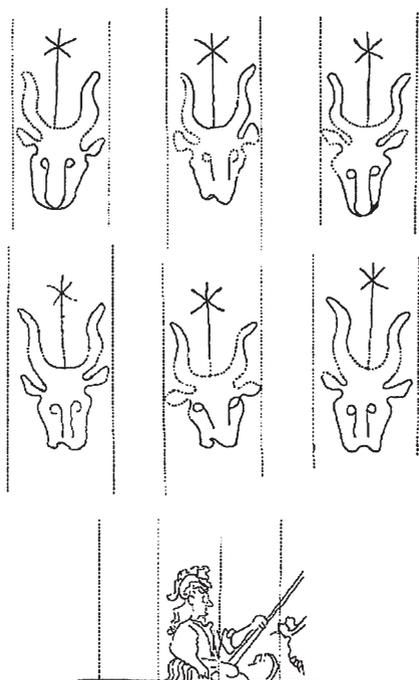


図8 中世ネーデルラント語訳ネイメーヘン版，ハッケボルンのメヒトヒルト
『神の愛の恩寵』 Nijmegen, f. 136v-f. 137r. Bromberg: 186.

ついて、ラテン語およびヨーロッパ諸言語で近代に至るまでに書かれたこの本の写本、および初期活版印刷本が250以上に上ることから、本書の広範な影響力が伺える。近代では、1877年にベネディクト会修道士らによって出された校訂版（Solesmesの修道士によって編纂）が長らく批判校訂版としてみなされてきたが、1370年に書き終えられた全7巻を含む唯一のラテン語写本（Codex Guelferbytanus Helmstadiensis 1003, ヴォルフエンビュッテル，アウグスト公図書館 Wolfenbüttler Herzog-August-Bibliothek）との間に、恣意的な挿入や章立ての不一致なども散見され、新たな校訂版の完成が待たれている⁵⁷⁾。校訂版において重視されるのは、上述のヴォルフエンビュッテル本に加えて、ラ

イブツイヒ本, ミュンヘン本, ザンクト・ガレン本, ゴータ本, アイスレーベン本の計6点である。ヴォルフエンビュッテル本以外は全巻揃っているわけではない。

すでに述べたように『特別な恩寵の書』は、メヒトヒルトの幻視体験を仲間の修道女たちが聞き書きするという形ですすめられた。「私たちは」という一人称複数が登場することもあり、必ずしも近代の「著者」概念を適用できるわけではない⁵⁸⁾。また、いくつかの箇所ドイツ語が使われていることから、もともとドイツ語で書かれたのだが、ラテン語訳だけが後代に伝わったとする説もある。しかしながら、少女時代からヘルフタ修道院の学校で学び、聖歌隊長でもあった彼女も、そして聞き書きをした修道女たちも、ラテン語をこなすことができたと考えるべきであろう。

『特別な恩寵の書』の中世オランダ語訳本に関するプロムベルクの詳細な研究によると、ヘルフタで元々書きためられたテキストはAからCの三つのグループに分けられていたと考えられる。グループAは全テキストが含まれたもので、5巻から7巻まで巻数のヴァリエーションがある。グループBはグループAの縮小版で5巻にまとめられる。これに加えて注目されるのは、グループAにはなかった第5巻の第27、28、29章がこのグループには含まれていることである。グループCは、テキスト断片がまとめられたもので、グループBのテキストが、必要に応じて加工され、短縮されたり、折りの形になっていた⁵⁹⁾。

ヘルフタ修道院内で複数の写本が制作されていたと考えられるが、それらが修道院以外にどのように伝えられたのかについては推測の域をでない。外部から監察も兼ねて靈的指導にきていた修道士たちを介して広まったとみるのが自然である。シトー会の靈的活動から離れたヘルフタ修道院には、1271年以降、ハレのドミニコ会⁶⁰⁾からミサなどの折に説教士が派遣されていたが、具体的な名前がわかっているのはマクデブルクのメヒトヒルトがあげている二人しかない。そのうちの一人ハインリヒ・フォン・ハレはヘルフタに入会する以前か

らの彼女の聴罪司祭で、彼女のメモにしたがって『神性の流れる光』のヴィジョンを書き留めた⁶¹⁾。ハインリヒはまた、ハッケボルンのメヒトヒルトの幻視体験の要約も書いたとされるが、これは失われている⁶²⁾。

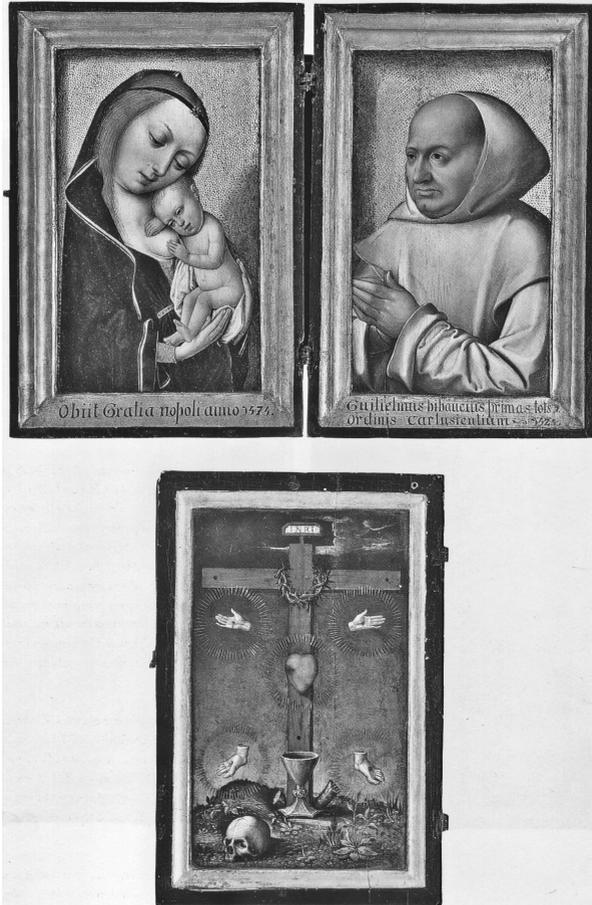


図9 マグダラのマリア伝の画家《カルトウジオ会士ヴィレム・ファン・ビボウトの二連画》1523年、25×14.5 cm、油彩、板、アムステルダム、個人蔵。蜷川 2017：173。



図10 古ドイツ語『イグナティウス伝』表紙 1590年 インゴルシュタット、
蜷川 2017 : 199.

聖歌隊長としてのメヒトヒルトの修道院内の役割は徐々にあきらかになっていくが、さまざまな祈りを指導していたと思われ、『特別な恩寵の書』にはミサなどでの「キリストの五つの傷」, 「聖心」, 「聖母」, 「聖顔」への祈禱文が記されている。メヒトヒルトは、エックハルトに始まる13世紀のドイツ神秘主義神学の系譜に含められることはないが、その祈りは16世紀の終わりまでにネーデルラントでかなりの広がりを見せる。1592年のブリュッセルの写本（王立図書館, II 1302）にはメヒトヒルトの幻視について書き込みがなされていた。1597年に死の床にあったネーデルラントのイエズス会士ペトルス・カニシウス（Petrus Canisius, 1521-1597）が胸元にもっていた本には、メヒトヒルトの聖心の祈りが彼自身の手で数多く書き込まれていた⁶³⁾。聖心崇敬は、ランツベルクのカルトウジオ会〔図9〕からイエズス会〔図10〕へと広がる中で、近代的崇敬へと変貌したものと思われる。

6. 聖母の聖心

聖母の聖心については、ヘルフタの三大神秘家それぞれについてすでに短く

概観した。聖母ばかりでなく修道女それぞれのハートが登場するが、ハートの交換やハートでの定住、ハートの合一などのイメージが、聖母の聖心との間に結ばれるわけではない。聖母の聖心はあくまで仲介者として機能するものである。

ハッケボルンのメヒトヒルトにおいてはまた、ブロムベルクが指摘するように、聖母の喜びや栄光に力点がおかれ、天の女王として冠を被る輝かしいイメージが主流である⁶⁴⁾。イエスの傷についても、それを神の愛と読み替えるシトー会の伝統を引き継いでおり、悲しみの聖母のイメージは限定的である。稀に聖母の悲しみに触れている箇所がある。しかしながら、たとえば神殿奉獻に際して、祭司シメオンの言葉「汝の魂は剣で刺し抜かれるであろう」は、悲しみにおける喜びに変化している（第1巻12章）。シメオンの言葉から聖母の七つの悲しみへと展開するのは、ドミニコ会のロザリオの祈りの整備や、中世末の受苦神秘主義の展開と合流して以降のことであろう。これらの問題については稿を改めることにしたい。

7. 結びに代えて

本稿は、15、16世紀の西欧に聖母の聖心に対する崇敬がすでに存在し、磔刑のキリスト像を内包して空に浮かぶハート形と、地上でそれを祈る聖母の姿を組み合わせた図像は、この崇敬に関連するものであったという仮説を立てる中で、その論証の一助として、聖心崇敬の中心地のひとつだった13世紀のヘルフト修道院および、聖心に関連した幻視体験がある3人の修道女について短く論じた。また、その叙述から聖母に関する事項をとりだすと共に、これらのテキストがさまざまな造形イメージにつながった可能性を探った。

フランチェスコ会やドミニコ会などの托鉢修道会が登場した13世紀は、神性と人間性を併せもつイエスの人間性の方に、より多くの思弁と実践とが向けられた時代であった。ザクセンのヘルフト修道院は、パリ大学やオクスフォード大学などで男性に認められていた学問を、女性にも授ける数少ない場所として

人気を博した。平信徒への働きかけが重視されるようになると、12世紀の神秘主義的潮流の中で生まれたイエスの聖心への崇敬が醸成されはじめていた。ヘルフタ修道院は、原点においてはシトー会と強く結びついていたことから、聖心に関する思想は到達していたと思われるが、学術と聖餐の典礼を重視した修道院長ハッケボルのゲルトルートの教導が、修道女たちの間に、ハートの交換や、ハートへの定住など、聖心崇敬に関する独特のイメージを出現させたものと思われる。また修道会は聖母に捧げられたものでもあったので、イエスの聖心に伴う聖母の聖心イメージは、修道女たちの著述に散見される。このことから聖母の聖心に対する崇敬が存在していたが、それはイエスの聖心のような特徴を有するのではなく、あくまで仲介機能を果たすものであった。また聖母の歎び、悲しみ、栄光という三玄義の中でも、聖母の悲しみは中世末におけるほど強調されていない。

聖心に関するこうした思索が造形イメージにつながった可能性について、未だ明確な証拠がみつかったわけではない。しかしながら、修道女たちの著述が修道院の外に広がり、その一部は祈禱文として近代まで伝わっていたことは論証可能である。

15、16世紀の図像とのかかわりについては、修道院以外の要因を考える必要があるが、この問題については稿を改めたい。

本稿は、科研費基盤研究（C）（一般） 課題番号20K00199 の研究成果の一部である。

註

- 1) ジョルジオ：3；テイシェイラ：14.
- 2) 引用文では原文にしたがった。邦文の「こころ」については、蜷川 2017：3-7.
- 3) 蜷川 2017：107-126.
- 4) 蜷川 2017：107-126. 同時代のネーデルラントも、ハデウエイク（Hadewijch, ?-c. 1250）、ナザレトのベアトレス（Beatrijs van Nazareth, 1200-1268）、ユリアナ・ファン・コルニロン（Juliana van Cornillon, ?-1258）、イダ・ファン・レーウウェン（Ida van Leeuwen, ?-1260）、イダ・ファン・ネイフェル（Ida van Nijvel, ?-1231/32）などの女性

神秘主義者を輩出していた。フランチェスコ伝のドイツ語訳をしたラムプレヒト・フォン・レーゲンスブルク (Lamprecht van Regensburg, c. 1215–after 1250) は、学問を積んだ男性より、女性神秘家の方が神の言葉をよく理解していると述べている。Bromberg: 5.

- 5) 蜷川 2017: 235-241.
- 6) 蜷川 2018: 19-44.
- 7) Johnson: 27 and note 8 によれば、この夢は15世紀前半に修道院長だったシュトルベルクのゾフィー (Sophie von Stolberg, 1409-1459?) により編纂された伝承に基づく。19世紀に出版された『マンスフェルト伯領修道院証書集』に収録されている。Krühne: 223. マンスフェルト伯領では11世紀頃に領内で銀山が発見されたことから経済発展がはじまった。所領と家修道院を中心に発達したドイツの貴族家門におけるマンスフェルト伯領の位置づけ、および伯が創設した修道院については、三浦: 359-389.
- 8) 夫妻にはゲルトルートとゾフィーという二人の娘がいたが、男子後継者がなかったため、彼らが属したホイヤー (Hoyer) 家は断絶し、ゾフィーが嫁いだクウェアフルト (Querfurt) 家の同名のブルクハルト 1世がマンスフェルト伯位を継承した。修道院への寄進は二人の娘婿にまかされ、死者への祈りが託された。こうした家門内の不安定に加えて修道女たちを巻き込んだのは、帝国の不安定な政治に翻弄されたザクセン地方の混乱である。Johnson: 28. ホーエンシュタウフェン (Hohenstaufen) 家の神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2世 (Friedrich II, 在位1220-1250) が、1227年にローマ教皇グレゴリウス 9世に破門されたことで、ザクセンでは司教座都市の間で帝国からの独立を求める争いが起こった。皇帝は翌年第6回十字軍の総司令官としてシリアに遠征するが、その間に帝国の分裂・領邦化がすすみ、1254年に皇帝が没した後、1273年にハプスブルク (Hapsburg) 家のルドルフ (Rudolf I, 在位1273-1291) が選ばれるまで、帝国は実質上の大空位時代を迎えた。大ゲルトルートは、ルドルフによる継承を祈り、予言した。Harrison: 34-37.
- 9) ヘルフタ修道院とマンスフェルト伯をはじめとする寄進者との間で交わされた、所領や租税の譲渡と売却、貸与、契約の確認については、三浦: 370-374. 妹のメヒトヒルトの著作には、修道女たちが自由七学芸の知識も得られるよう修道院長が環境を整え、その必要性を擁護したことが記されている。Johnson: 24; Repges: 34-39. またヘルフタ修道院の生活全般と修道院内の学問所については、Spitzlei: 43-61.
- 10) Johnson: 28.
- 11) Harrison: 18.
- 12) Repges: 38.
- 13) Johnson: 30.
- 14) *Ibid.*

- 15) *Ibid.* Regges: 38-39. 再建後の詳細および文献は、シュネル・ウント・シュタイナー社発行の小冊子『ヘルフタ修道院』をみよ。*Kloster Helfta*.
- 16) Johnson: 8-15. たとえば大ゲルトルートには、聖書注解や翻訳や手紙類などの著述があったはずだが、彼女の二大著作のみが残っている。そのひとつ *Documenta spiritualium exercitionum*（霊的訓練の手引き）は、1536年にカルトゥジオ会士ランツベルクによって書き写された。これが、今日のラテン語、フランス語、英語版の元になっている。
- 17) たとえば、Luddy: 33 ; Dombi: 257-268, *etc.*
- 18) Paquelin: xxvii-xxxi; Schindele: 156-168.
- 19) Freeman: 102-103. 1228年の法令では、修道女はシトー会の監察や訪問を受けることなくシトー会の慣例にしたがうことができると明記されており、ヘルフタ修道会が実質的にはシトー会会則に基づく生活を送っていたとする説もある。1253年にハッケボルのゲルトルートの兄弟によって創設された女子修道院も、シトー会の娘修道院だがシトー会への正式な編入はなかった。また三浦は、ヘルフタが徴税権の委託先をシトー会からベネディクト会へ転じたとしているが、そのアイデンティティは一貫して創設家門の死者の年祈禱であることを強調している。三浦：363, 375 ; Spitzlei: 29-43 もみよ。
- 20) ベルナルドゥスやサン＝ヴィクトルのフーゴーと聖心崇敬については、蜷川 2017 : 113-116頁。実際の著者は不明とされるが、アベラルとエロイズの書簡集には、ベルナルドゥスやサン＝ヴィクトル派からの靈感によるハートの交換、あるいはハートが溶けて交じり合うイメージがある。ネーデルラントのルトガルデイスは、最初にイエスとハートを交換した幻視体験があるとされるが、このことについては稿を改めたい。Newman: 287.
- 21) 『特別な恩寵の書』の中で、修道院のミサは修道士 (*religiosi fratres*) によって行われたと記載されている。会派は記されていないが、*fratres* はフランシスコ会の修道士に対して用いられていたことから、その関係が指摘される。Harrison: 27. また、1256年のフィレンツェの教令でドミニコ会士が修道女の告解の聴聞にあたるべきことが定められたため、ドミニコ会士がヘルフタ修道会のために説教を行い、教導したと考えられている。Spitzlei: 33-36.
- 22) Johnson: 36.
- 23) Johnson: 37-45.
- 24) 後にベネディクト14世 (Benedictus XIV, 在位1740-1758) となる枢機卿プロスペロ・ラムベルティーニ (Prospero Lambertini) は、その著 *De servorum Dei beatificatione et beatorum canonizatione* において、この修道院の歴史で「大」というタイトルに値する唯一の人物だとしている。Johnson: 2; Regges: 105.
- 25) このことに関する確実な証拠はないが、メヒトヒルトの死を扱った本書の記述と、『神

- の愛の使者』の記述の間に多くの類似性がみられることから推測されている。梅原：489；Bromberg: 12-21.
- 26) 二人の修道女の名前は正確には知られていないが、大ゲルトルトの著述との類比から、彼女が含まれていたとされる。また、本書の書名が神から示されたことについては、梅原：558-559.
- 27) 梅原：486-498. 第1巻には、教会歴の祝日の順序に従う幻視と啓示の内容。第2巻には、霊的な生活を送る中で与えられたさまざまな恩寵の体験。第3巻には、霊的な生活についての教訓。第4巻には、修道会に関わる出来事と啓示の内容。第5巻には、死者たちの運命についての啓示の内容。第6巻には、ハッケボルンのメヒトヒルトの死の様子と彼女への賛辞。第7巻には修道院長ハッケボルンのゲルトルトの死の様子と彼女への賛辞が記されている。
- 28) 梅原：490-491.
- 29) 梅原：499-501.
- 30) 梅原：529-530.
- 31) Hochenauer: 16-18.
- 32) 修道院の外から教を乞うために多くの人が訪れたことや、同時代あるいは後年の読者によって、残された写本に註となる書き込みが数多くなされていることについては、Johnson: 16-22.
- 33) 小竹：611-612.
- 34) Johnson: 9-11; Repges: 106.
- 35) 14世紀の写本は、ライプツィヒ大学図書館 MS. 827. 16, 17世紀にはさらに3点のラテン語版やその他のヨーロッパ言語版が出版された。Johnson: 11 and note 46.
- 36) 最終的に5巻本になるまでの経緯は、Johnson: 12-15.
- 37) 小竹：615-670.
- 38) 小竹：604-612.
- 39) Newman: 290-292; Spitzlei: 140-164.
- 40) Johnson: 6; Grimes: 141.
- 41) Johnson: 17-18.
- 42) 小竹：621.
- 43) Johnson: 97-134
- 44) Gertrude, Herald 4.50.1 (CF 85: 239; Sch 255: 402); Johnson: 7.
- 45) Gertrude, Herald 4.50.2-3 (CF 85: 240-41; Sch 255: 404); Johnson: 7. 視覚や聴覚ばかりでなく嗅覚が強調されている点は注目に値する。薔薇は前節でも触れたように聖母とも結びつきが強いが、聖心崇敬の中で特別に扱われている点は重要である。ハートと薔薇の結びつきはルターの薔薇を想起させるからである。また、薔薇色を、キリストの神

性と人間性を象徴する色として繰り返し用いている。Johnson: 103.

- 46) Johnson: 19-20.
- 47) Johnson: 18.
- 48) 小竹: 429-434.
- 49) 小竹: 435-466; Hochenauer: 36-37; Repges: 46-71.
- 50) 小竹: 441.
- 51) Repges: 63.
- 52) 小竹: 437.
- 53) 小竹: 448.
- 54) Eichberger: 483-512. この概念に関連した崇敬は16世紀に新たな広がりをみせる。ヘルフタの聖心崇敬も、16世紀に新たな展開をみせる点に注目しておきたい。
- 55) 小竹: 449.
- 56) Bromberg: 186.
- 57) 梅原: 494.
- 58) 梅原: 494-495. 近代の著者概念は、ロラン・バルト、花輪光訳「作者の死」『物語の構造分析』みすず書房、1979年や、ミシェル・フーコー、清水徹、豊崎光一訳『作者とは何か』ミシェル・フーコー文学論集、哲学書房、1990年などによる批判的考察の中で輪郭づけられる。
- 59) Bromberg: 173-174.
- 60) ドミニコ会は、1221年にアルプス以北にフランスからハンガリー、ポーランドまで広がる独自の管轄地域を形成し、いくつかの都市の拠点が連繋していた。ザクセン最初の地方管区長にはエックハルト（Meister Eckhart, c. 1260-c. 1328）が就任した。当時ヘルフタ近郊では、エアフルト（1229年）、ハルバーシュタット（1232年）、ハレ（1271年）、ノートハウツェン（1286年）にドミニコ会修道院が作られた。Bromberg: 10.
- 61) 「メモ」にあたる語は、文字とイメージとの両方が含意され得る。仮に造形メモであったとするなら、ヒルデガルトが描いたような流動性が捉えられていたのかもしれない。
- 62) Bromberg: 10-11.
- 63) Bromberg: 21.
- 64) Bromberg: 68-69.

文献一覧

- Bromberg, R. L. J. ed. *Gertrudis van Helfta, Het boek der bijzondere genade van Mechtild van Hackeborn*. (Zwolle: W. E. J. Tjeenk Willink, 1965), 2010 dbnl/ R. L. J. Bromberg.
- Eichberger, Dagmar. "The Seven Sorrows of the Virgin: Spreading a New Cult via Dynastic Networks." Christine Göttler and Mia M. Mochizuki, eds. *The Nomadic Object. The*

- Challenge of World for Early Modern Religious Art*. Leiden and Boston: Brill, 2018, pp. 483-512.
- Freeman, Elizabeth. "Nuns," *The Cambridge Companion to the Cistercian Order*, Mette Birkedal Bruun, ed. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2013, pp. 100-111.
- Grimes, Laura Marie. "Theology as Conversation: Gertrude of Helfta and her Sisters as Readers of Augustine." Ph. D. Diss., University of Notre Dame, 2004.
- Harrison, Anna. "Sense of Community Among the Nuns at Helfta." Ph. D. Diss., Columbia University, 2007.
- Hochenauer, Josef. *The Three Holy Women of Helfta: Gertrud (the Great) of Helfta, Mechthild of Hackeborn, Mechthild of Magdeburg, Selected Texts and Prayers*. Lindenberg: Kunstverlag Josef Fink, 2012.
- Johnson, Ella. *This is My Body. Eucharistic Theology and Anthropology in the Writings of Gertrude the Great of Helfta (Cistercian Studies Series Book 280)*. Collegeville, Minnesota: Cistercian Publications, 2020.
- Kloster Helfta. Zisterzienserinnenpriorat St. Marien*. Regensburg: Verlag Schnell & Steiner GmbH, 2013 (1995).
- Krühne, Max, ed. *Urkundenbuch der Klöster der Grafschaft Mansfeld*. Geschichtsquellen der Provinz Sachsen und angrenzen der Gebiete (49 vols.), 20, Halle: Otto Handel, 1888.
- Luddy, Ailbe J. *St. Gertrude the Great: Illustrious Cistercian Mystic*. Dublin: M. H. Gill and Son, 1930.
- Markus Dombi. "Waren die hll. Gertrud und Mechtild Benedikterinnen oder Cistercienserinnen?" *Cistercienser-Chronik* 25 (1913), pp. 257-268.
- Newman, Barbara. "'Iam cor meum non sit suum': Exchanging Hearts, from Heloise to Helfta." E. Ann Matter & Lesley Smith, ed. *From Knowledge to Beatitude. St. Victor, Twelfth-Century Scholars, and Beyond*. Indiana: University of Notre Dame Press, 2013.
- Paquelin, Louis, ed. "Praefatio, Sanctae Gertrudis Magnae, virginis ordinis sanctae Benedicti, Legatus divinae pietatis, accedunt ejusdem Exercitia spiritualia," *Revelationes Gertrudianae ac Mechtildianae*. vol. 1, Paris: H. Oudin, 1877.
- Repges, Walter. "*Den Himmel muss man sich schenken lassen*," *Die Mystikerinnen von Helfta*. Leipzig: Benno-Verlag, 2002.
- Schindele, Pia. "Elemente der Benediktinerregel in den Offenbarungen der heiligen Gertrud von Helfta," *Und sie folgten der Regel St. Benedikts: die Cistercienser und das benediktinische Monchtum: Eine Würdigung des abendländischen Mönchsvaters als Nachlese zum Benediktusjubiläum 1980*. Ambrosius Schneider, ed., with Adam Wienand, Cologne: Wienand, 1981.

ヘルフタ女子修道院と聖心崇敬—聖母の聖心への造形的アプローチへ向けて（蜷川）

Spitzlei, Sabine B. *Erfahrungsraum Herz. Zur Mystik des Zisterzienserinnenklosters Helfta im 13. Jahrhundert*. Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann-Holzboog, 1991.

梅原久美子「解説：ハッケボルのメヒティルト『特別な恩寵の書』」富原『女性の神秘家』485-498頁。

梅原久美子訳「ハッケボルのメヒティルト『特別な恩寵の書』」富原『女性の神秘家』499-574頁。

小竹澄栄「解説：マクデブルクのメヒティルト『神性の流れる光』」富原『女性の神秘家』429-434頁。

小竹澄栄訳「マクデブルクのメヒティルト『神性の流れる光』」富原『女性の神秘家』435-466頁。

小竹澄栄訳「解説：ヘルフタのゲルトルート『神の愛の使者』」富原『女性の神秘家』603-612頁。

小竹澄栄訳「ヘルフタのゲルトルート『神の愛の使者』」富原『女性の神秘家』613-670頁。
ジョルジオ・テオドロ・デ「キリストの聖心に対する信心：神学的図像学的研究」蜷川『ハート形のイメージ世界』3-12頁。

ティシェイラ、ヴィトール「ポルトガル海上帝国におけるハートの象徴、図像、芸術。日の出に向かうハート」蜷川『ハート形のイメージ世界』13-42頁。

富原真弓編訳/監修『女性の神秘家』中世思想原典集成15, 平凡社, 2002年。

蜷川順子『聖心のイコロジー—宗教改革前後まで』関西大学出版部, 2017年。

蜷川順子「[ルターの薔薇]の成立事情（講演録）」『関西学院大学キリスト教と文化研究《特集》宗教改革500年』第19号（2018年），19-44頁。

蜷川順子編『ハート形のイメージ世界』晃洋書房, 2021年。

三浦麻美「中世マンズフェルト伯領におけるヘルフタ修道院—カルテュレルに見る女子修道院と創設家門」『人文研紀要』中央大学人文科学研究所, 第89号（2018年），359-389頁。

省略記号

CF: *Cistercian Fathers series*. Cistercian Publications.

SCh 255: Gertrude d'Helfta. *Oeuvres spirituelles IV; Le Héraut, Livre IV*. Trans. Jean-Marie Clément, the nuns of Wisques, and Bernard de Vregille. Paris: Les Éditions du Cerf. 1978.